

# 幼稚園教育実習における弾き歌い活動の考察

## —学生の「自己評価」と「楽しさ」の観点から—

南 谷 悠 子

**摘要：**本研究は、保育者養成校において、幼稚園教育実習の際に実習園から出される弾き歌い課題を、子どもの前で行ったことについての「自己評価」と、弾き歌い時に「楽しさ」を感じられたかどうかの観点から考察を行った。「自己評価」については、58%の学生が「ある程度できた」という自己評価であり、一定の達成感を得られていたことがわかった。学生自身が課題を見つけ、体験を経験化したことや、子どもが元気に歌ってくれたことによって、学生の意欲が喚起されていたと考えられた。また、弾き歌い時の「楽しさ」については、74%の学生が楽しさを感じていた。自己評価が高かった群では91%の学生が楽しさを感じており、自己評価が低かった群でも50%の学生が楽しさを感じていた。初めての教育実習において、学生は緊張し、うまく弾けなかったりしながらも「楽しさ」を感じていた。自分が弾くピアノで子どもが歌を歌うこと、自分のピアノで子どもとつながる楽しさを経験できたことは、学生の保育観に大きく影響を及ぼすものであると考えられた。今回、学生の自由記述から、「新たな価値付けがなされたと考えられる楽しさ」がみられた。次回の幼稚園教育実習において、「楽しさ」の質がどのように変化していくのかを明らかにすることを今後の課題としたい。

**キーワード：**幼稚園教育実習 弾き歌い 自己評価 楽しさ

### はじめに

平成29年3月に、新しい幼稚園教育要領<sup>1)</sup>、保育所保育指針<sup>2)</sup>、幼保連携型教育・保育要領<sup>3)</sup>が告示され、平成30年4月より施行される。今回の改訂においては、「生きる力の基礎」を育むために、「育みたい資質・能力」として、「学力の三要素（①知識及び技能の基礎 ②思考力、判断力、表現力等の基礎 ③学びに向かう力、人間性等）」が示された。その上で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が挙げられている。その10項目目は「豊かな感性と表現」である。子どもの豊かな感性を育てていくことは、保育者にとって大切な責務のひとつである。

幼稚園や保育園では、歌唱活動が行われる。その際、保育者の弾き歌いが表現豊かであるならば、子どもの感性は育まれていくのではないだろうか。三宅<sup>4)</sup>は、「子どものモデルである保育者が豊かな音楽性や高い技術と表現力を持っていることが大切である」と述べている。保育者が豊かな表現力を持って演奏できることは、子どもの感性を豊かにし、子どもらしい素直な表現を引き出すことができるであろう。岡本<sup>5)</sup>は、子どもの感性を育む音環境について、保育のなかにあるさまざまな音に意識を向けることの大切さを主張している。保育者が弾き歌うとき、歌声やピアノの音ひとつ取っても、丁寧に気持ちをこめて行うことで、子どもの感性が育まれていくと考えられる。子どもらしい素直な表現を引き出すためには、保育者が曲想にふさわしい表現をすることが必要である。そのためには、基礎的なピアノ奏法の技術や歌唱技術は欠かすことができない。

大豆生田<sup>6)</sup>は、「子ども自身が自分から（主体的に）何かを楽しんでやるなかで、無理なく自然に『経験する』『学ぶ』ということが大切です」と述べている。今、目の前にいる子どもにどういった経験が必要なのか。子どもの発達段階を考慮しつつ、子どもが「楽しい!」「もっとやりたい!」と感じられるような活動を保育者は計画・実践していかなければならない。民秋<sup>7)</sup>は、「保育者と子どもは、学びの姿勢に基づく、まさしく『共に育ち合う』関係にあるといえよう」と述べ、同じ目の高さで接することについて、「保育者は、子どもの喜びや悲しみを自らの喜びや悲しみとすること、子どもの驚きや感興をも自らのものとする、したがって子どもの感動を共にする、『共感する』ことであり、これへの問いかけである」と述べている。ひとりの人間として向き合い、子どもと同じ気持ちでいることが大切であると考えられる。

保育者は、ときには本気で遊ぶ「仲間」となったり、ときには子どもの発達を支える「援助者」となったり、様々な役割があるといえよう。保育者が歌唱活動を子どもと行っているときの心持ちは、「仲間」である必要はないだろうか。子どもと行う歌唱活動を、保育者も心から「楽しい」と感じられること。その気持ちがあった上で、音楽の基礎技術があれば、初めて自分の思うように「表現すること」が可能となるのではないだろうか。

## I. 本学のカリキュラム

本学子ども学科では、1年次に「音楽基礎Ⅰ」及び「音楽基礎Ⅱ」が開講されており、全員が受講している。この科目の学修目標は、「音楽を基礎的に理解するための楽典及びソルフェージュを学修し読譜力をつけ、ピアノ奏法技術を習得する」である。そして、「音楽基礎Ⅰ」の到達目標は、「基本的な楽譜の読譜力を身につける」と、「簡易伴奏のついた子どものうたを弾き歌いできるようにする」の2点である<sup>8)</sup>。「音楽基礎Ⅱ」の到達目標は、「音楽基礎Ⅰ」の到達目標に加え、「簡単な旋律に簡単な伴奏をつけることができる」となっている<sup>9)</sup>。

1年次の「音楽基礎」で培ったピアノの基礎的な奏法及び弾き歌い技術を土台として、2年次

の「音楽表現Ⅰ」では、ピアノは個人レッスンとなり、学生は子どものうたのレパートリーを増やしていく。授業構成は、90分間を半分に分けて、45分間はピアノの個人レッスン、45分間は歌やキーボードハーモニーを学ぶことになっている。学修目標は、「保育者・小学校教諭として求められる音楽表現に関する知識や技術を習得するために、ピアノ奏法の基礎技術を身につけながら、子どものうたの演奏法や伴奏法を学修する」である。弾き歌いについての到達目標は、「表情豊かに子どものうたを弾き歌いできるようにする」となっている<sup>10)</sup>。「音楽表現Ⅱ」の学修目標は、「音楽表現Ⅰで習得した音楽表現の知識や技術を土台に、表現技術の幅を広げ、深めること」である。弾き歌いについての到達目標は、「子どものうたのレパートリーを増やし、表情豊かに弾き歌いできるようにする」となっている<sup>11)</sup>。

## Ⅱ. 問題の所在

子どものうたを弾き歌いする力は、3つの場面で求められる。まず初めに実習であり、次に就職試験、そして保育者になってからである。本学子ども学科入学時にピアノ経験の有無について調査をしたところ、平成28年度入学生は、ピアノ未経験者は43%、平成29年度入学生は55%であった。このことから、ピアノ未経験者及びピアノ初学者を「音楽基礎」の中で、子どものうたを弾き歌いできるようにするためには、学生本人の意欲と努力が欠かせない。本学は3年制であり、2年生の6月に初めての幼稚園教育実習を実施することになっている。つまり、それまでにピアノ未経験者及びピアノ初心者を、子どものうたが弾き歌いできるようにしていかなければならないという現状がある。

香曾我部<sup>12)</sup>は、「音楽を正確に、完璧に演奏する保育者が、本当に“よい保育者”なのでしょうか」と指摘し、「まずは音楽を楽しむことを大切に」と述べている。音楽の基礎技術を習得することと共に、保育者を志す学生は、子どもと行う歌唱活動を心から「楽しい」と感じられる力が必要なのではないだろうか。その気持ちがあった上で、音楽の基礎技術があれば、初めて自分の思うように「表現すること」が可能になると考えられる。そのために、学生が初めての教育実習において、弾き歌い活動時に「楽しさ」を感じられたかを知ることは意義があると考えられる。また、「自己評価」が低かったとしても、一定の「楽しさ」は感じられるのではないだろうか。「楽しさ」を感じられることは、保育者の資質のひとつであるとはいえないだろうか。

以上のことから、本研究の目的は、実習での弾き歌い活動についてアンケート調査を行い、「自己評価」はどうであったか、弾き歌い時に「楽しさ」を感じられたかどうか及びその理由を明らかにし、考察することにある。そして本研究から、「音楽基礎」と「音楽表現」のあり方についての示唆を得ることである。広辞苑<sup>13)</sup>では、「楽しい」とは、「満足で愉快的な気分である。快い。」とある。本稿における「楽しさ」とは、広辞苑によるものとする。

### Ⅲ. 弾き歌い活動についてのアンケート調査

幼稚園教育実習（以下、教育実習と表記）について、本学では4週間を前期と後期に分けて2週間ずつ実施することになっている<sup>14)</sup>。教育実習に行く学生は、「音楽表現Ⅰ」（資格必修）を全員受講しており、2017年6月に、前期の教育実習2週間を行った学生を対象に、弾き歌い活動についてのアンケート調査を行った。対象者は25名（男子4名、女子21名）である。幼稚園側の都合で夏休みに実習を実施予定の1名については、アンケートを行わなかった。また、教育実習後第1回目の「音楽表現Ⅰ」授業内において教育実習後に弾き歌い活動についてのアンケート調査を行ったが、欠席した学生については個別にアンケート調査を行った。

アンケート調査の回答は、成績には含めないことを伝え、率直に回答するよう求めた。なお、データについては研究のみに使用することを説明し、同意を得た。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 課題曲について

「実習園から課題（弾き歌い）が出たか」について、「あった」21名（84%）、「なかった」4名（16%）であった。幼稚園の教育方針や、前期の教育実習のため観察実習がメインになり、実習生に弾き歌いまで求めない幼稚園があることが考えられる。実習園からの課題（弾き歌い）が「あった」21名について、「課題曲数は何曲あったか」では、課題曲数が、3曲から6曲出た幼稚園が81%を占めていた。なお、実習が始まってから課題を出された学生が3名いたが、これらの曲数は含めていない。

教育実習で「課題（弾き歌い）を行ったか」については、「行った」19名、「行わなかった」2名であった。課題曲は主に生活のうたが多く出されており、6月の季節に合った曲もよく出ている。また、仏教系やキリスト教系の幼稚園では、課題曲が他の幼稚園に比べ多めにみられる傾向があった。

#### 2. 学生の自己評価

実習で課題（弾き歌い）を行った19名について、課題（弾き歌い）を行ったことについての「自己評価」を5件法で回答してもらった（図1）。「よくできた」は0名であるが、「ある程度できた」が11名（58%）であった。過半数の学生は「ある程度できた」という自己評価であり、一定の達成感を得られたと考えられる。

自己評価については、自由記述で感想を書いてもらった。筆者が文章を一文にし、カテゴリー分けを行った。自己評価が、「ある程度できた」を自己評価が高い群、「あまりできなかった」と「ほとんどできなかった」を自己評価が低い群として示す（表1-1、表1-2）。

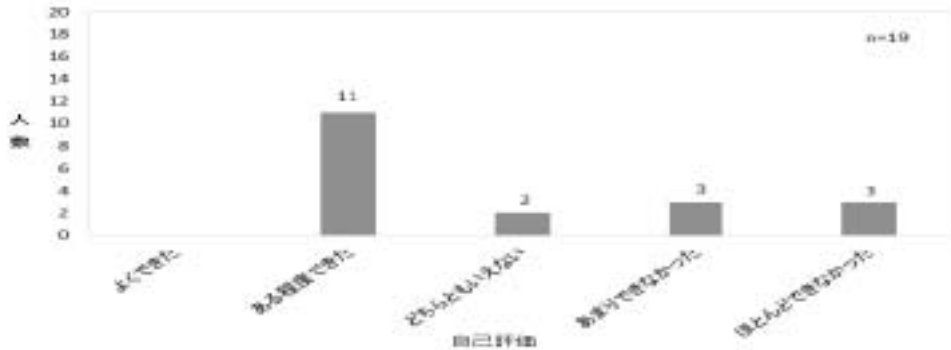


図1 学生の自己評価

表1-1 自己評価が高い群 計11名の自由記述から

( )は回答数

カテゴリー	記述内容
達成感(16)	なんとかやりきることができた(1) 練習と同じようにできた(1) だんだんスムーズに弾けるようになった(1) 少し間違っても弾き続けられた(1) ミスなく両手で弾けた(1) 最終日は、しっかり子どもを見て弾けた(1) 園児と一緒に歌うことができた(1) 弾き歌いがある程度できた(1) 子どもの顔を見て弾けた(1) しっかり弾けた(1) 間違えても弾き続けられた(1) 止まらずにできた(1) 先生に確認してもらってOKをもらった(1) 両手で弾けて先生にほめられた(1) 普段通り弾くことができた(1) やっていく内に慣れることができた(1)
子どもの存在(4)	子どもが大きい声で歌ってくれた(2) 園児が歌ってくれた(1) 「先生間違えた」と言われた(1)
学生の気持ち(5)	最初は緊張した(2) とても緊張した(1) 嬉しかった(1) 動揺した(1)
事実(ネガティブ)(6)	間違えてばかりだった(1) ピアノに集中しすぎた(1) 子どもの顔を見れずに弾いていた(1) 間違えることはあった(1) 普段通りにはできなかった(1) よく間違えた(1)
反省(1)	リラックスできたらよかった(1)

\*回答数計 32 \*重複回答あり

表 1-2 自己評価が低い群 計 6 名の自由記述から

( )は回答数

カテゴリー	記述内容
達成感(2)	伴奏は練習通りうまくできた(1) 全部止まらずにできた日もあった(1)
子どもの存在(1)	間違えたとき、子どもは止まらずに歌い続けていた(1)
学生の気持ち(2)	悔しかった(1) 緊張した(1)
事実 (ネガティブ) (8)	前奏で間違えて止まってしまった(1) 声を出せなかった(1) 両手が止まった(1) 子どもたちの歌を聞いてから分からなくなった(1) 自分が思うように弾けなかった(1) 右手だけになってしまった(1) 止まってしまった(1) 立って弾いたのであまり弾けなかった(1)

\*回答数計 13 \*重複回答あり

表 1-1 自己評価が高い計 11 名の自由記述からは、「～できた」「～弾けた」等、理由は様々であるが、学生が一定の達成感を得られていることがわかる。

表 1-2 自己評価が低い計 6 名の自由記述からは、「事実 (ネガティブ)」の記述が多くみられたが、一定の達成感を感じた学生もいたことがわかる。

### 3. 学生の弾き歌い時の楽しさ

実習で課題(弾き歌い)を行った 19 名に、「弾き歌い時の楽しさ」について 5 件法で回答してもらった。「とても楽しかった」は 9 名、「少し楽しかった」は 5 名、「どちらともいえない」は 3 名、「あまり楽しくなかった」は 0 名、「とても楽しくなかった」は 2 名であった。「とても楽しかった」と「少し楽しかった」は、計 14 名 (74%) であった。

次に、「弾き歌い時の楽しさ」について、自己評価が高い群と低い群に分け、図に示す(図 2-1、図 2-2)。自己評価が高い 11 名では、「とても楽しかった」が 7 名、「少し楽しかった」が 3 名、計 10 名 (91%)。「どちらともいえない」が 1 名であり、子どもとの弾き歌い活動が楽しかったということがわかる(図 2-1)。一方、自己評価が低い 6 名については、「とても楽しかった」が 1 名、「少し楽しかった」が 2 名、計 3 名 (50%)。「どちらともいえない」が 1 名、「とても楽しくなかった」が 2 名であった。自己評価は低かったが、楽しさを感じた学生が 3 名みられた(図 2-2)。

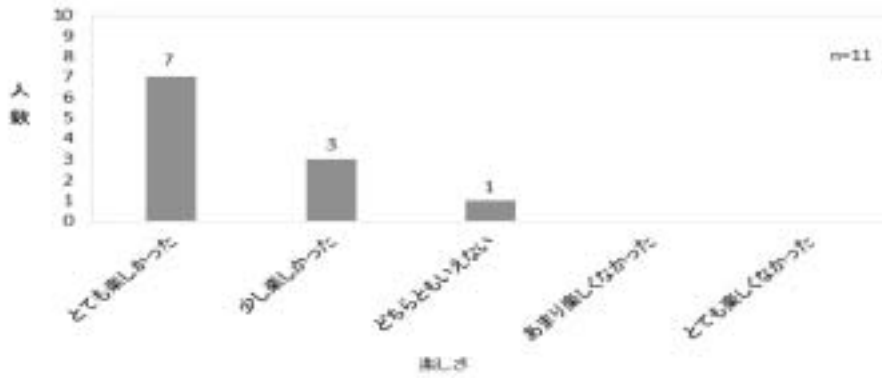


図 2-1 弾き歌い時の楽しさ「自己評価が高い群」

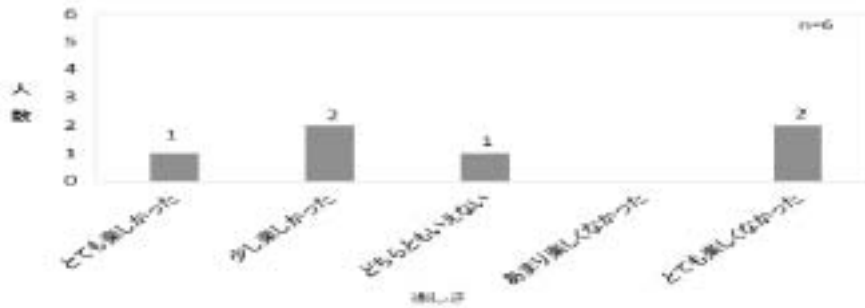


図 2-2 弾き歌い時の楽しさ「自己評価が低い群」

学生の弾き歌い時の楽しさについて、自由記述で感想を書いてもらった。筆者が文章を一文にし、カテゴリ分けを行ったものを、自己評価が高い群と低い群に分けて示す（表 2-1、表 2-2）。

表 2-1 弾き歌い時の楽しさについて自己評価が高い群計 11 名の自由記述からは、学生の気持ちは全員がポジティブなものであったことがわかる。その理由として、子どもの存在の大きさがあつた。自分のピアノに合わせて歌ってくれたことが、学生にとってポジティブな気持ちにつながっていることがわかる。

表 2-2 弾き歌い時の楽しさについて自己評価が低い群計 6 名の自由記述からは、ポジティブな気持ちを感じた学生は、その理由として子どもの存在の大きさを読み取ることができる。また、ポジティブな気持ちを感じつつも、ネガティブな気持ちになった学生がいたこともわかる。

表 2-1 弾き歌い時の楽しさについて自己評価が高い群 計 11 名の自由記述から

( )は回答数

学生の気持ち	理由
とても楽しかった(3)	園児が、「先生すごい!」「先生上手!」等と声をかけてくれた(1) 大きな声で歌ってくれるので(1) 大きな声で元気よく歌ってくれたから(1)
少し楽しかった(4)	子どもが笑顔で歌ってくれた(1) 子どもがピアノも上手だったと褒めてくれたから(1) 楽しさは感じたが、それ以上に緊張した(1) 緊張して、心からは楽しめなかった(1)
良い経験になった(2)	ピアノを弾くときは、やりがいがあった(1) 「今、先生をしているんだ」という実感があった(1)
ピアノを弾くのが楽しかった(1)	子どもたちが元気良く歌ってくれたので(1)
嬉しかった(1)	自分の弾いているピアノに合わせて元気に歌ってくれたので(1)
楽しいなと感じた(1)	自分が弾くピアノで、子どもが歌ってくれること(1)
自信につながった(1)	子どもが自分の弾くピアノに合わせて元気に歌ってくれる姿が(1)
楽しく弾き歌いすることができた(1)	子どもたちの大きな声のおかげで(1)

\*回答数計 14 \*重複回答あり

表 2-2 弾き歌い時の楽しさについて自己評価が低い群 計 6 名の自由記述から

( )は回答数

学生の気持ち	理由
少し楽しかった(3)	緊張したけれど(1) 子どもたちが一緒だったから(1) 元良く歌ってくれた子どもたちと一緒に歌えて(1)
楽しく弾けた(1)	自分のピアノを通して子どもとやりとりできたこと(1)
嬉しかった(1)	自分のピアノで子どもが歌ってくれたから(1)
申し訳なかった(2)	両手できちんと弾きたかった(1) 止めてしまったから(1)
楽しく歌うことができなかった(1)	弾くことに集中してしまった(1)

\*回答数計 8 \*重複回答あり

#### 4. 学生が感じた今後の課題

今回、前期の教育実習 2 週間を行った学生 25 名に、「今後の課題」についての自由記述からソフトウェア「KH Coder」<sup>15)</sup>により、内容分析を行った。



作成した共起ネットワーク（図3）からは、「頑張る」の中心性が高く、「ピアノ」「歌う」「練習」「弾く」「声」「両手」「意識」「止まる」「自信」「持つ」等と共起している。今後も弾き歌いの練習を頑張っていきたいという気持ちが表れていると考えられる。また「自信」は、「持てる」「余裕」と共起しており、「余裕」は、「園児」「意識」と共起していることから、学生は、練習を頑張り、自信を持てるぐらいの余裕があれば、園児を意識して弾けることにつながるということを学んだとみられる。

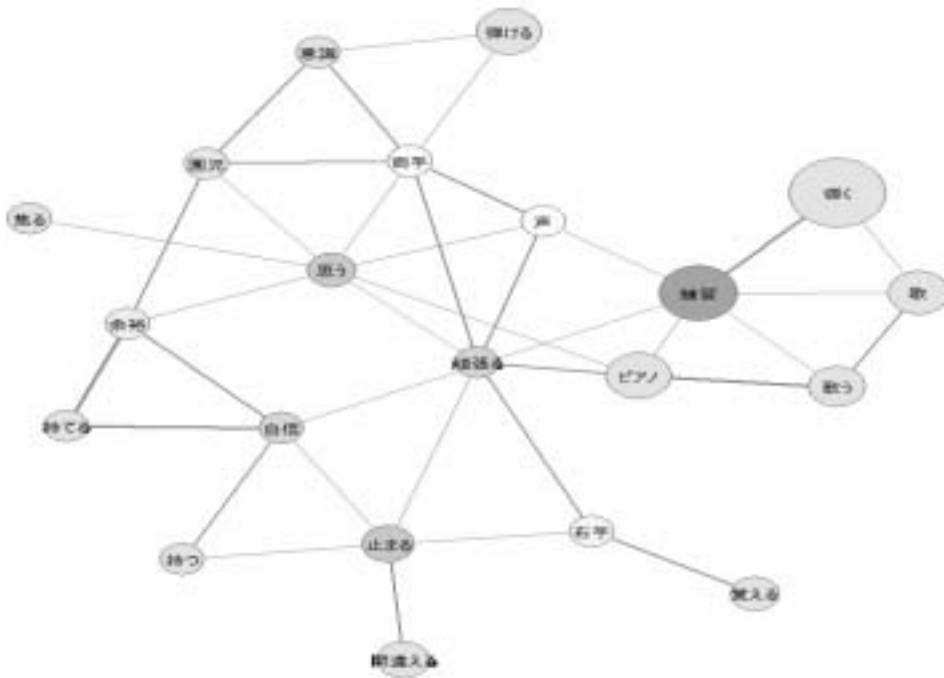


図3 今後の課題 共起ネットワーク

## V. 考察

初めての教育実習において、学生は緊張しながら子どもとの弾き歌い活動を行ったと考えられる。しかし、弾き歌いを行った「自己評価」について、58%の学生は「自己評価」が高かった。そして、自己評価の高い群の自由記述からは、達成感を感じられた記述が多くみられた。普段通りに弾くことができたり、練習した成果が出た学生がいた。しかし、間違えてしまったが最後まで弾き続けられたこと、その弾き歌い時の過程こそが成長の証と考えられはしないか。最初は子どもの顔が見られなかったが、最終日には子どもの顔を見て弾くことができた学生もいた。実習の中で、学生自身が課題を見つけ、体験を経験化し、課題をやり遂げた達成感は何物にも代えがたいものであろう。また、子どもが元気に歌ってくれたことによって、学生の意欲が喚起されて

いたと考えられる。最初は思うようにはできなかったが、子どもの前で弾かせてもらうことによって、学生は一定の達成感を得られるようになっていったと推察される。自己評価の低い群の自由記述からは、ネガティブな事実が多くみられた。前奏で止まってしまったり、声が出せなかったり、右手だけになってしまったり等である。しかし、達成感を感じた学生もみられた。全部が全部うまくいかなかったわけではなく、次へとつながるような経験であったと考えることができる。

学生の「弾き歌い時の楽しさ」について、弾き歌いを行った学生全体では、楽しさを感じた学生が74%であった。自己評価が高い群で、楽しさを感じた学生は91%である。自由記述からは、全員がポジティブな気持ちを感じており、そこには子どもの存在の大きさを見て取ることができる。子どもが元気に歌ってくれたり、笑顔で歌ってくれたこと。これらの記述からは、子どもと同じ気持ちでいることができた学生の姿が想像できる。ひとつの楽曲を通して、子どもと「楽しい」気持ちを共有できたことで、共感が生まれたと推察される。そして、自分が弾くピアノで歌ってくれていることに喜びを感じた学生もいる。自分が弾くピアノで子どもが歌を歌うということ。自分のピアノで子どもとつながる楽しさを経験できたことは、学生の保育観に大きく影響を及ぼすものであると考えられる。

学生の「弾き歌い時の楽しさ」について、自己評価が低い群では、50%の学生が弾き歌い時に楽しさを感じていた。自由記述からは、ネガティブな気持ちよりも、ポジティブな気持ちの記述が多くみられた。また、ポジティブな気持ちを感じつつ、ネガティブな気持ちを感じた学生もいた。そして、ポジティブな気持ちについては、子どもの存在の大きさを読み取ることができる。自己評価が低いことから、思うようにはできなかったが、子どもと一緒に歌えたことや、自分のピアノで子どもが歌ってくれたことにより、学生はポジティブな気持ちになったと考えられる。自己評価が低くても、子どもとの音楽活動は楽しかったと感じた学生が50%いた。子どもとの活動において、保育者を志す学生が楽しさを感じられたことは、保育者としての大切な資質を持っているとはいえないだろうか。「とても楽しくなかった」の2名は、全部できなかったわけではなく、できた曲やできたところもあったとのことである。今回の経験を、後期の教育実習に活かしてほしい。

また、「楽しさ」については今後への貴重な示唆を得ることができた。広辞苑による、「満足で愉快的気分である。快い。」よりも高次のもの、「新たな価値付けがなされたとみられる楽しさ」がみられたことである。例えば、「自分のピアノを通して子どもとやりとりできたこと」や「先生をしている実感があった」といった記述である。次回の教育実習において、楽しさの質がどのように変化していくかについても着目したい。

今後の課題の自由記述からは、「頑張りたい」との記述が多かった。そして、ピアノと歌を同時に練習することや、練習を頑張って自信を持てるぐらいの余裕を持ると、子どもを意識して弾けることにつながるということを実習の弾き歌い活動から学んだとみられる。ここからわかることは、手元や楽譜を見てばかりでは、なかなか子どもの様子や表情に意識を向けることは難しい

ということである。「音楽」の授業において、視覚に頼りすぎず、手や指の感覚で主要な和音をつかめること、そして主要な調について、簡単な曲を移調して弾けることを目指したい。

今回、学生が子どもとの弾き歌い時に「楽しさ」を感じた一番の理由として、子どもの存在があった。子どもと楽しい気持ちを共有できたことや、子どもと同じ気持ちでいられたこと、自分のピアノで子どもとつながる楽しさを経験できたことは、保育者を志す学生が保育観を形成していく上で、大きな影響を及ぼすものであったと考えられる。まずは、子どもの感じる楽しさを感じ取ることができ、子どもとの活動が「楽しい」と感じられること。そして、子どもの心に寄り添い、共感できる保育者を「表現」や「音楽」の授業を通して、養成していく必要がある。

保育所保育指針第1章総則 1 保育所保育に関する基本原則 (3) 保育の方法には、「オ 子どもが自発的・意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互のかかわりを大切にすること」とある<sup>16)</sup>。幼稚園教育要領では、第1章総則 第1 幼稚園教育の基本において、「1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより、発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」とある<sup>17)</sup>。保育の主役は子どもであり、子どもが主体的に活動することが大切である。初めての教育実習において、学生は緊張したり、うまく弾けなかったりしながらも、「楽しさ」を感じていた。学生も子どもも、ひとつの楽曲の中で様々な気持ちになったと思われるが、学生は子どもに助けられたとみてよいのだろうか。学生なりの「ひたむきさ」を子どもが感じ取り、歌で返してくれたことにはならないだろうか。もしそうであれば、学生によって子どもは自発性・主体性を引き出され成長したとも考えられる。それは、実習生であるからこそできることであったのかもしれない。幼稚園教育要領では、保育内容「表現」の内容の取り扱いについて、「他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」との記述がみられる<sup>18)</sup>。表現は他者との関わりにより高められていくことが示唆されている。実習での弾き歌い活動は、学生と子どもとが、伝え合い・聴き合い・通じ合っていく、主体的で対話的な学びであったといえるのではないかな。

## おわりに

音楽は子どもの豊かな感性を育むものである。前奏で止まってしまったり、子どもの歌いたい気持ちがなくなってしまう。音を間違えても心の強さでカバーして止まらないこと、そしてピアノで弾き歌いしながら、どれだけ子どもの心に寄り添うことができるのか。音が合っているとかが合っていないとかではなく、その先にある大切なもの＝「表現」に気づかせたい。子どもの豊かな感性を育み、素直な表現を引き出すことのできる保育者とはどうあるべきか、決して技術偏重であってはならないと考える。

子どもと音楽活動をするとき、まずは「楽しさ」を感じる大切である。そして音楽の基

礎技術を習得し、初めて自分の思うように「表現する」ことができると考える。今後の課題として、後期の教育実習において、学生の感じる「楽しさ」の質がどのように変化していくのかを明らかにすることにある。

【引用文献・参考文献】

- 1) 『平成 29 年年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (原本)』 (2017) チャイルド本社
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 三宅啓子(2014) 「子どもの音楽的発達と音楽環境」 三森桂子・小島エマ(編) 『実践保育内容シリーズ 5 音楽表現』 一藝社 p.27
- 5) 岡本祐子(2010) 「音・音楽に対する感性と表現」 平田智久・小林紀子・砂上史子(編) 『最新保育講座 11 保育内容「表現」』 ミネルヴァ書房 p.111
- 6) 大豆生田啓友(2014) 「ワークで学ぶ 保育内容はじめの一步」 大豆生田啓友・渡辺英 則・柴崎正行・益田まゆみ(編) 『最新保育講座 4 保育内容総論 [第 2 版]』 ミネルヴァ書房 p.8
- 7) 民秋言(2009) 「子どもの育ちを支える保育者のあり方」 民秋言・吉村真理子(編) 『新訂保育内容総論—保育内容の構造と総合的理解—』 萌文書林 p.217
- 8) 「2017 年度名古屋経営短期大学 シラバス」  
[http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017\\_52600015.html](http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017_52600015.html) (2017 年 10 月 6 日閲覧)
- 9) 同上 [http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017\\_52600027.html](http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017_52600027.html)(2017 年 10 月 6 日閲覧)
- 10) 同上 [http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017\\_52600016.html](http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017_52600016.html)(2017 年 10 月 6 日閲覧)
- 11) 同上 [http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017\\_52600028.html](http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2017_52600028.html)(2017 年 10 月 6 日閲覧)
- 12) 香曾我部琢(2009) 「幼稚園で生きる保育技術 ピアノ・手遊びという保育ツール」 諏訪きぬ(編) 『幼稚園実習ガイドブック —実習の中で磨かれる“技と心”—』 p.84
- 13) 新村出(編)(2008) 『広辞苑』 第 6 版 岩波書店 p.1749
- 14) 「平成 29 年度 幼稚園教育実習の手引き」 p.3
- 15) 樋口耕一(2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』 ナカニシヤ出版
- 16) 前掲 『平成 29 年年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (原本)』 p.27
- 17) 前掲 『平成 29 年年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (原本)』 p.7
- 18) 前掲 『平成 29 年年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (原本)』 p.21

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)